

HAJの沿革

—「みんなのヒマラヤ」から「創造するヒマラヤ」へ、そして「新生 HAJ」の出発—

■HAJの発足

「私は登山家ではありませんが、1963年にヒマラヤを訪れて以来、その美しさにうたれ、このヒマラヤを多くの人々にぜひ見せてあげたいものだと考えるようになりました。」岐阜に拠点を構えてインドと取引していた実業家・柴田金之助がこのような夢を語り、その素朴で新鮮な考えに共感し HAJ を立ち上げたのは、名古屋に在住する沖允人ら有志であった。登山家ですらヒマラヤは夢の夢であった1967年10月、まだトレッキングという言葉が日本になかった時に HAJ は発足した。

■みんなのヒマラヤ

「ぜひ見せてあげたい」との思いは、1968年から始まった「ヒマラヤの旅」シリーズとして実行された。第一回は24名が参加しアンナプルナ、エヴェレスト街道を巡り、1971年の第七回には73名が参加し、ネパール・ヒマラヤの各所を巡り、一部先鋭的な登山家の領域とみられていたヒマラヤを身近に引き寄せる原動力となったのである。「HAJ」は低廉な費用で共にヒマラヤの旅を楽しみ、登山、学術、芸術などの諸分野で調査・研究・観賞を進めていこうとする人々の集まりで、ヒマラヤを知ることによって、ヒマラヤの国々と日本との友好親善の架け橋となることも大きな目的として設立しました。」1968年4月に発行された会報第一号にはこのように書かれている。

そのことの実践としてブータン、チベット、ワハーン、ラダックなどの地域研究会、地図研究会などが活発に活動していた。

■創造するヒマラヤ

1970年のネパール・ヒマラヤの再解禁は、日本の登山界を活気づけ、合わせて日本の経済発展を見据えた海外渡航熱に呼応するように、国内にヒマラヤ、アルプスを巡る営業会社が設立された。

1973年3月発行の「ヒマラヤ通信16号」に、柴田会長は「HAJの体質改善」として、「ヒマラヤ登山と、入域の困難な地域への調査隊の派遣を目指す」ことを発表した。

折しもHAJ内にもヒマラヤの小登山では飽き足らず、本格的な登山を研究、情報交換をする場を模索し、1971年6月「東北地区ヒマラヤ研究会」を仙台で開催すると同時に、1972年にはエクスペディション研究グループ(EXP研)が立ち上げられた。EXP研では、1974年にラムジュン・ヒマールを皮切りに登山隊を派遣し、その中から「1981年カンチェンジュンガ縦走登山」が企画された。

HAJは設立当初から名古屋に事務所を置いていたが、10年を経過して事業の幅も性格も変化していることを考慮して法人化を目指すこととなり、1978年執行体制を見直し事務所を東京に移転した。この結果、専務理事・稲田定重、事務局長・山森欣一が就任した。稲田専務理事は、就任にあたり、機関誌「ヒマラヤ」に、「創造するヒマラヤへ」と題する挨拶を寄せ、「みんなのヒマラヤ」を超えて「創造するヒマラヤ」へ前進すると覚悟を述べている。稲田はこの年の秋に、インドの七千m峰トリスルを成田から成田まで28日間で成功させ、日本のこれまでのヒマラヤ登山の常職を覆す、まさに創造するヒマラヤを実践していたのである。翌1979年11月には、東京に山森を専従者とした事務所を構えた。

こうして1980年に入ると、カンチェンジュンガ縦走登山を中心として、ヒマラヤの主街道を離れ、道なき道に分け入り、未知と困難を求めるHAJの「創造するヒマラヤ」の実践が展開されたのであった。

■新生 HAJ の出発

HAJは1980年以降、「創造するヒマラヤ」を合言葉に100隊を超える登山隊をヒマラヤの各地に派遣し、HAJを足がかりに多くの人たちがヒマラヤの素晴らしさに触れてきた。しかし、時の流れとともに登山界の状況は大きく変化し、既存の概念や組織にとらわれることなく誰でもヒマラヤ登山を楽しめる時代となった。このような中、自ら登山隊を編成し実践することを主体とするそれまでの活動形態でのHAJの存続は望むべくもなく、組織としての変革が求められる状況となった。

2009年、HAJは新生委員会を設けて解散、存続、存続するのであればこれからの活動のあり方等について議論を重ね、理事会、臨時総会、通常総会を経て新たな体制と方向性を確認した。

それは、30年続いた専従体制を廃して役員等の執行体制を一新し、ヒマラヤ登山の実践から一歩退き、事業規模を縮小しつつも専らヒマラヤに関わる団体として、ヒマラヤ登山の文化的側面を含めヒマラヤ地域に関する研究と情報の収集・整理並びに発信を機軸として活動を継続する道であった。

このような経過を経て、HAJの活動は現在に続いている。